

側でかなり長い間保存された傾向は、台風が九州の東側を通った6420号の場合も見られ、しかもほとんど同じ場所に同じ形で停滞した。この場合は、台風後面にもなった降雨帯であったが、これらの傾向は、台風の収束が地形により影響されていることを示すものと思われる。

5. むすび

台風にもなる降雨帯とセルの動きについては、各地のレーダーでかなり多くの観測がおこなわれており、地形との関係も検討されている。しかし、台風にもなる降雨量は、強雨セルによって甚だしく左右されることや、レインバンドを形成している強雨セルの詳細については十分知られていなかった。ここでは、等雨量線指示装置によりとくに強い降雨セルを主として、その地形との関係、すなわち発生、発達、消滅過程について研究をおこなったものであるが、結果として次のことがいえよう。

- (1) レインバンド内の単一強雨セルの寿命は、6411号の場合平均20分、移動速度32m/sで、700mb～500mbの風に一致している。
- (2) いくつかのレインバンドが通過する際、強雨セルが発生する所はレインバンドの傾きが同じであれば同じ場所に現われやすく、また、発生は九州山脈の東側で、西側にはほとんどない。
- (3) 強雨セルの発現頻度分布は、地形傾斜の分布によく対応しており、地形波長は20km程度の短かい波長に対応がよい。

- (4) 強雨セルには保存性があり、地形こう配が負になってもすぐには減少せず、むしろすこし増大してから減少する傾向がある。
- (5) 強雨エコーの高さは7,000～11,000mに達し、ブライトバンドは観測されない。

なお、この観測に使用した気象用レーダーは、日本人工降雨研究協会が科学技術庁の委託をうけて人吉に設置したものである。

参考文献

- 1) Doi, K. (1961): Formation and Movement of Precipitation Bands, *Geophys. Mag.* **31**, 313～330.
- 2) Ligda, M.G.H. and W.A. Mayhew (1954): On the Relation ship between the Velocities of Small Precipitation Areas and Geostrophic Winds, *J. Met.* **11**, 421～423.
- 3) 今田克 (1960): 広島県の雨量予報について, *研究時報*, **12**, 724～743.
- 4) 内田泰, 大西正信, 岡林昌弘 (1961): 奈良県の雨量分布と地形による降雨について, *研究時報*, **13**, 160～164.
- 5) 今井一郎, 柳沢善次, 廖学益 (1960): 1957年8月5日～8日の関東地方の局地性大雨のレーダーおよびメソ解析, *研究時報*, **12**, 9～37.
- 6) 伊藤剛男, 椎葉盛澄 (1963): 宮崎県のこう水予報のための雨量調査, *研究時報*, **15**, 164～171.
- 7) 桜井兼市 (1962): 降雨セルの移動について, *天気*, **9**, 361～365.

「秋雨前線について」のお知らせ

従来、梅雨現象に対応する「梅雨前線」は気象用語として広く用いられてきたが「秋の長雨（秋霖—しゅうりん—）」に対応する前線には名前がなかった。

しかし昭和34年頃から報道関係者の間でこの前線が「秋雨前線」と呼ばれることが多くなり現在では一般でも使われるようになった。

気象庁で検討した結果、年によって遅速、長短はあるが、9月中頃から10月中頃にかけて従来「秋霖」と呼んでいた秋の長雨があり、その頃に前線が日本列島に沿って停滞することは事実である。この前線は梅雨期の梅雨

前線ほど顕著ではないが秋のくもり空や、長雨の原因となり、またしばしば台風と結びついて、日本に大雨を降らせ、災害をおこすから停滞性の前線に何らかの名前をつけて、それを予報用語とすることになった。

「秋雨前線—あきさめぜんせん—」と呼び「しゅうりょうぜんせん」と云わない。

報送関係者により気象現象を適確に表現するために用いられたニックネームが予報用語になったのは近年の例として「集中豪雨」について二度目である。

(藤井幸雄)